広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語における断りの方略
Author(s)	フェルフールト, アレクサンダー
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 20期 : 42 - 49
Issue Date	2006-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038837
Right	
Relation	

日本語における断りの方略

アレクサンダー・フェルフールト

0. はじめに

依頼と断りは日常生活でよく直面することである。なんと言っても人間関係を損ねる危険性を持ち、どの国でも依頼するのと、それを断る際には母国語でも注意深く言葉を選ぶのではないだろうか。

ところで、第二言語として日本語を勉強する学生が日本に留学することになるに当たって、自分の国と全く違う談話構成でコミュニケーションを取ることが必要となる。言葉自体を相当究めても、その文化や言語的機能の知識がないとコミュニケーション上の誤解や失敗を招きやすい。どれだけ日本語ができても日本人と友達になるというのはなかなかできないという話は少なくない。これは文法知識や語彙の不足ではなく、その日本語をどういう風に用いるかという語用論的な問題である。

ということで、本稿では日本では依頼表の在り方と断り方に対するストラテジーを研究し、それを西洋の様子と対照していく。もう一つは、日本での断りに当たる言語行動の概略を示すことを目標とする。

1. ポライトネス理論

依頼表現と断り方は「ポライトネス」いわゆる「丁寧」と深く関係がある。現在行われているポライトネスを扱う研究は割と多い。初めてポライトネス方略の普遍性を示そうとしたのはブラウンとレビンソン（１９８７）のポライトネス理論である。世界中の敬語教育に大きな波紋を投げかけたものである。断り方の方略構造を考える時に、ポライトネスというのは何なのかを知る必要がある。

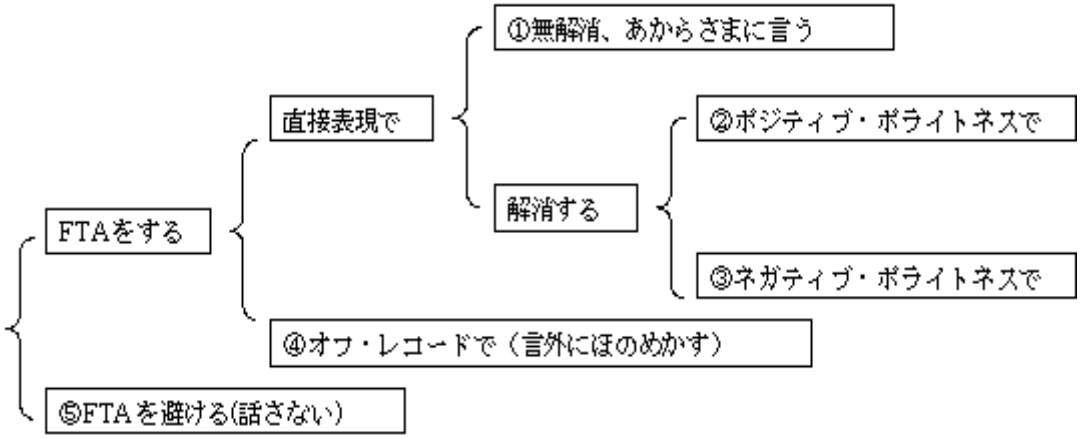
オランダでは視線を交わして話すのは丁寧だとされていても、日本では逆に目を交わして話すと礼儀正しくないと思われることが多いようだ。このように、世界中では「丁寧」という概念がだいぶ違ってくる。

言語使用における機能を重視した「ポライトネス論」を提唱したブラウンとレビンソン（Brown and Levinson, 1987）は「ポライトネス」を「相手の気分を割さないように、コミュニケーションを楽しく円滑に進めるための言語方略」と定義された。井出（２００１）は、「経緯表現は敬語とは異なり、普遍的ポライトネス原理のほぼ全てに通じる概念ということができる」と説明する。

ブラウンとレビンソンのポライトネスの普遍理論では、「フェイス」を鍵概念としている。対人コミュニケーションにおいては、このフェイスが関わってくる。更に、この「フェイス」は「ポジティブ・フェイス」(positive face) と「ネガティブ・フェイス」(negative face) の二種類に区分されている。「まず、ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、好かれたい、評価されたいという「プラス方向への欲求」であり、これに対して「ネガティブ・フェイス」は、少なくとも他者に邪魔されたくない「マイナス方向に関わる欲求」として捉える。

依頼などのような言語行動には相手のフェイスをつぶし、或は自分のフェイスがつぶされてしまう恐れがある。人間のコミュニケーションの中には、常に相手のフェイスを脅かす行為 FTA (Face Threatening Act) が含まれる。

図1 FTAをするためのストラテジ



対人コミュニケーションを円滑に進めるために、FTA を解消しなければならない。そこで、FTA の重みの値に応じて①無修正・あからさまに言う、②ポジティブ・ポライトネス（相手の面子を立てるように言う）③ネガティブ・ポライトネス（相手の面子を潰さないように言う）④オフ・レコード（露骨に言わずに、言外にほのめかす⑤FTA をしない（FTA を避ける）とういうように５つの方略を用いることができる。

ストラテジー①は、FTA の値が小さく、FTA を解消する必要がない。家族や親友に FTA をする時に当たる。ストラテジー②は、親しくない相手に使う聞き手の常時の欲求を認めるためのストラテジー。ジョークや同意する、関心を引くというような手を使って親しくなろうと言う意図から行われるストラテジー。日本に来る留学生はポジティブ・ポライトネスの次の例は聞き慣れたのではないだろうか。

(日本語があまり上手でない留学生に向って)
日本語、すごく上手だね。(相手への誉めを誇張する)。

ストラテジー③はFTAの値が比較的に大きい。この場合はたとえば「言う」の変わりに「おっしゃる」「申し上げる」などを使う日本語の敬語に当たるものである。ストラテジー④はFTAの値はかなり大きい時に使われている。例えば、「窓を開けて下さい」と直接依頼する変わりに、「この部屋は寒いですね」という間接的な表現をすることである。ストラテジー⑤は、FTAの値があまりに大きい、つまり面子を潰すことが避けられない時に使われる。

2. 日本語におけるポライトネス動作

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論に続いて、日本語におけるポライトネスを概観しよう。Scollon and Scollon (1995) によると、西洋人はポジティブ・ポライトネス方略に対応し、韓国、中国や日本などのようなアジアの国々はネガティブ・ポライトネス方略に対応する傾向がある。ここでは、方略を「話し手が当該言語行動の最終目的を達成するための、言語行動の方向 (森山「断りの方略」) と定義する。

他の研究にも、日本人は言語行動においてポジティブ・ポライトネス方略よりもネガティブ・ポライトネス方略を用いがちだということが明らかになった。Ohtsuka(2002,2003)は、JSL／JFL 学習者のための教科書ではネガティブ・ポライトネス方略の使用を中心に書かれたことを明らかにした。

Shigemitsu と Ohtani (2004) は、日本人の言語行動を観察した結果、アメリカ人よりもネガティブ・ポライトネス方略を用いようとすることを論証する。
これらの研究から、日本人はポジティブ・ポライトネスに方向づけられた欧米人と交流する際、コミュニケーション上の誤解や被害が起こりやすいと言えよう。

井出 (1982、1989) は、「わきまえ」という社会的要素があり、日本語では特に大きな役割を果たしている。日本語での発話は二つに分けて認知される。「その二つとは日本人が社会・文化的認識パターンとして持っているウチ・ソトを区別するわきまえである。これが、同じ社会・文化的認識というものである。発話のコンテキストがウチとソトで選択しなければならないという言語形式とコンテキストの語用論的一致が、日本語では義務的である (井出 1995)。要するに、井出の理論では、日本語における丁寧語はポライトネス方略ではなく、モダリティーとして見なされている。積極的にさまざまな丁寧方略を駆使するというケース以外に、社会的規範、いわゆる「わきまえ」に従った言語行動が丁寧さを生み出すと主張する。

これはブラウンとレビンソンのポライトネス理論に扱われていない部分である。

3. 日本語における「断り」に当たる言語行動

前述したように、依頼と断りに関する言語行動はポライトネスと深く関係がある。言語使用を観察してみると、依頼と断りは人間関係を損ねる可能性が高いことは確かだ。話し手も聞き手も面子を潰すことがあるので、そうはならないように色々なストラテジーが用いられている。そこで、摩擦が生じないように円滑なコミュニケーションを取るためにどんなストラテジーを使えば効果的であるかを考えた時に、上下・親疎関係が関わってくる。これは欧米でも断り方と深く関係がある。しかし、アジア、特に昔から上下関係が大切な社会的役目を果たしてきた日本では言語行動に大きな影響を与えている。英語を第二言語とする日本人には、依頼に対する断り、提案、招待などでは、語用論的転移が起こるのを明らかにしたのはビーブ（1990）である。

このビーブ（1990）の研究に基づいて Ikoma と Shimura が、アメリカ人の上級の日本語学習者の語用論的転移を研究した。アメリカの日本語学習者と日本語母語話者の言語行動を観察した上、日本語学習者は

１） 未完成の文発話を用いない
２） 妥当でない「結構です」を多く用いる
ということが分かった。

4. 断りの方略

断りを分析する上で問題となることの一つは、具体的な個別表現に変異が多すぎるということである。それよりも、方略を観察した方が効果的である。
日本人大学生の断り行為を扱う森山卓郎の「断りの方略」の研究では、前記の「結構です」について断りを分類する必要があるとする。「結構です／いいです」を使えるのは、相手のする依頼の言語行動そのものが依頼というより勧めになる場合である。
勧めとは、依頼の受け手の利益を前提としているもので、断ることは相手が勧めを申し出る必要を否定するという意味になる。このように、断り方の方略構造を考える上では最初に依頼関係を、依頼者の利益かどうかで二つに分ける必要がある。

この研究は、依頼者利益の場合について調べたものである。
そこで、次の四つの類型が設定された。

① 嫌型（やりたくない）
② 嘘型（都合がつかない）
③ 延期型（考えておく）
④ ごまかし型（笑ってごまかす）

更に、この方略は上下親疎関係を中心に調査された。一般的な方略の順位を単純化して整理すれば、次のようである。

❶親しい ：男性はより率直表示（嫌型）が多い
相手が上　　：関係置換の方略（嘘型）
相手が下・同等：率直表示（嫌型）

❷親しくない　　：男は嫌型、女は嘘型が多い
相手が上　　：関係置換の方略（嘘型）か直接表示（嫌型）
相手が下・同等：嘘型、嫌型、延期型

親しい場合に嫌型が多いという事は、永続的な人間関係を保全するために真実を率直に言う必要を感じることから応じたようだ。つまり、親しい友人に嘘をついたとしたら、後でバレる場合には相手の関係が損害を受けることになるからである。
親しくない場合は特に女性の場合では嘘型が多い。これは目上の相手には自分の利益を優先するのが相手の面子を潰すことになるという日本人の考え方が関わってくると言えよう。二回目の断りの際、男性では嫌型が増えるが、女性の方では「都合がつかない」という嘘型が急に増える傾向は非常に興味深い。この展開は社会的な立場から非常に興味深い。つまり、男性の方は二回とも依頼される場合には、窮地に追い込まれて仕方がなく、本当の意向を主張するのに対して、女性は嘘をつき、いわゆる相手への気配りから敢えて自分の自然な心情とはちがったことをいうことによって相手利益を優先するということである。
逆に言えば、女性は直接自分の意向を主張しないということになる。社会的に弱い立場に置かれることが多い女性は自分の意向を優先させることを表示しにくいと言えるかもしれない。

5.「断り」において受け手が感じる不愉快度

上記から日本人はどのような断り方を用いるのかを見てきたが、その断りにおいて、

断られる側はどのように解釈されるのかを見ていく。村井（2004）は、この視点から断りの方略を分析した。

方略に対する不愉快度を計るために、次の断りパターンを基本とする。

「ねえ、このチケット、買ってよ。」
「ごめん、　今お金がなくて　　買えないんだ。」
（詫び）　　（弁明）　　（不可）

そして、３つの断り方略を紹介する。

方略①は、（詫び）と（弁明）を含み、方略②は、（弁明）は含むが（詫び）は外した。方略③は（不可）のみとした。研究方法はこの３つの方略を④場面の調査で不愉快度を付けてもらう形になっている。

表１：方略の分類

方略	機能	例
不可	直接的な断り	行けません、出来ない
弁明	断りの理由	時間がない、忙しい
詫び	遺憾の発明	すみません、ごめん

結果は全体としてみると、方略①と②は不愉快度が低く、方略③では高くなった傾向が見える。方略②と方略③と方略が簡素化されるにつれて不愉快度がたかくなる。
このことから、受け手は親しい友人であっても、「行けない」や「お金がない」のような単純すぎる断り方ではなく、詫びや理由を述べた断り文を期待しているものと思われる。

表２：相手の気配りを感じる断られ方

文体関係	件数	方略関係	件数
表現の選択に気をつけること	８	謝罪があること	２３
言葉遣いが丁寧であること	６	理由があること	１６
		代案があること	５

その上、調査協力者に、「どのような断り方をされた時、相手の気配りを感じますか」を質問した結果、顕著なことは「理由」と「代案」よりも「謝罪」が高く評価されたということである。更に、この研究では方略だけではなく、文体自体も観察された。そこ

で、協力者の回答を比較してみると、方略が不愉快度に与える影響が、文体の影響よりも大きいことが分かる。要するに、この研究から日本人の多くは言葉自体よりもその言葉の機能より気にすることが分かる。その中でも、気配りのある言い方には、謝罪が必ずなくてはならないということが言えよう。

6. おわりに

これまで見てきたように、日本人の言語行動は社会的な役。いわゆる「わきまえ」と深い繋がりがあるようである。日本では親疎・上下の違いで言語行動が変わってくることが著しい。これは、対人関係を維持することが必要となる断りの場合には特に談話構成や断りの方略に現れやすい。こういう言語機能の知識は、日本語学習者あるいは日本語を使う環境にいる外国人にとってコミュニケーションを円滑に進めるために身につけなければならない知識であるのではないだろうか。
ここで触れた方略以外にも、ポライトネスに関するターン・テーキング、相槌、敬語などの要素は断りにも関わってくる。それを次の課題にしたい。

参考文献

Brown and Levinson (1987)「Politeness: some universals in language use」『Cambridge U.P.』

村井巻子（2004)「断り」行為において受け手が感じる不愉快度は何に起因するのか　－　親しい友人の場合」『社会言語科学会第１４回大会発表論文集』95－98

母育新（2002)「ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較　－　日本語教育の視点からの考察」『麗沢学際ジャーナル』10(1) 75-85

森山卓郎（1990)「「断り」の方略　－　対人関係調整とコミュニケーション」『月刊言語』Vol.19 no.8 59-66

東照二「丁寧な英語・丁寧な日本語　－　異文化コミュニケーションのために」『日本語のコミュニケーションの言語問題』凡人社 33-48

井出祥子（1995)「現代日本語の敬語は　敬語の現在と未来　語用論から見た敬語わきまえを指標するモダリティ表現としての丁寧語」『国分学』40-14

吉岡泰夫（2001)「対話インタラクションとしての敬語行動」『談話のポライトネス国立国語研究所 111-122

ルンティーラ・ワンウィモン（2004)「対人日本語学習者の「提案に対する」断り」表現における語用論的転移　－　タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121 号 46-55

カノックワン・ラウハブラニキット（1997)「日本語学習者にみられる「断り」の表現－日本語母語話者と比べて－『世界の日本語教育』７，1997 年 6 月

インターネット

Yuga Shigemitsu (2003) 「Politeness strategies in the context of argument in Japanese debate shows」

Hisako Yamagashira (2001) 「Pragmatic transfer in Japanese ESL refusals」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第 31 号、258-275　2001